

## Ichthyological Research 67 巻 2 号掲載論文 和文要旨

### トウゴロウイワシ科ヤクシマイワシ亜科の新属 *Doboatherina* と 4 新種を含む構成種の分類学的再検討

笹木大地・木村清志

モノグラフ 67(2): 225–261

形態学および分子系統学的解析に基づいて、インド洋–太平洋域の熱帯から温帯にかけて分布する海産トウゴロウイワシ科の新属 *Doboatherina* (トウゴロウイワシ属) を記載するとともに、この属を構成する 4 新種の記載と 6 既知種の再記載を行った。Sasaki and Kimura (2014) によってギンイソイワシ属 *Hypoatherina* から除外された“*Atherina*” *valenciennei* や “*Atherina*” *woodwardi*, およびこれらに遺伝的に近縁である *Atherinomorus duodecimalis* や *Atherinomorus aetholepis* は本新属に含まれた。本新属はヤクシマイワシ亜科に含まれ、次のような形態形質の組み合わせによって定義される。前上顎骨上向突起はやや短く最大幅の 1.5–3.3 倍；前上顎骨の後方は徐々に細くなり、後方の側突起は小さいかあるいはない；歯骨上縁後方に通常突起を有する；歯骨上枝の後端は尖るか鋭角；前鰓蓋骨前部隆起縁には隅角部の直上に深い凹部がある；肛門は腹鰭後端より前方に位置する；体側中央鱗列（第 3 鱗列）の露出部は背腹方向に幅広く、その鱗の最大幅とはほぼ同じで、その上下の鱗列と同幅。本新属の構成種とその分布域は次のとおりである。*Doboatherina aetholepis* (Kimura, Iwatsuki and Yoshino 2002) (タイランド湾, フィリピン, マレーシア, インドネシア, パプアニューギニア), *D. balabacensis* (Seale 1910) (本研究においてネオタイプを指定；フィリピン), トウゴロウイワシ *D. bleekeri* (Günther 1861) (ベトナム北部, 中国, 台湾, 韓国, 日本), *D. duodecimalis* (Valenciennes in Cuvier and Valenciennes 1835) (インド洋–太平洋の熱帯域に広く分布, コモロ諸島, マダガスカル, セーシェル, スリランカ, タイ, インドネシア, パプアニューギニア, ニューカレドニア), *D. iwatsukii* sp. nov. Sasaki, Kimura and Satapoomin (タイのアンダマン海沿岸, タイランド湾, ベトナム), *D. magnidentata* sp. nov. Sasaki, Kimura, Satapoomin and Nguyen (タイランド湾, ベトナム), *D. salangensis* sp. nov. Sasaki, Kimura and Satapoomin (タイのアンダマン海沿岸), *D. valenciennei* (Bleeker 1854) (スリランカ, タイ, ベトナム, マレーシア, シンガポール, インドネシア), *D. woodwardi* (Jordan and Starks 1901) (新標準和名リュウキュウイソイワシ, 沖縄), ネットアイイソイワシ *D. yoshinoi* sp. nov. Sasaki and Kimura (八重山諸島, フィリピン)。

(笹木：〒517–0404 三重県志摩市浜島町浜島 3564–3 三重県水産研究所；木村：〒514–8507 三重県津市栗真町屋町 1577 三重大学大学院生物資源学研究所)

## フィリピンから得られたナマズ目ハマギギ科の 1 新種 *Netuma patriciae*

高橋夢加・木村清志・本村浩之

本論文 67(2): 264–273

フィリピンのパナイ島およびルソン島から得られた 10 標本 [標準体長 (SL) 127.3–303.4 mm] に基づき、ナマズ目ハマギギ科 *Netuma* (新称: オオサカハマギギ属) の 1 新種 *Netuma patriciae* を記載した。本種は *Netuma thalassina* (Rüppell, 1837) と臀鰭軟条数が重複すること (17–19, 後者では 15–17) や頭部背面に明瞭な溝をもつことでよく類似する。しかし、本種は左右の鋤骨歯帯が癒合すること (vs. 離れる) や遊離脊椎骨数が 43–44 と多いこと (vs. 41–42) で後者と区別できる。一方、本種は鋤骨歯帯が癒合することでオオサカハマギギ *Netuma bilineata* (Valenciennes in Cuvier and Valenciennes, 1840) と類似するが、遊離脊椎骨数が 43–44 と少ないこと (vs. 47–51) や頭部背面の溝が長いこと (頭長の 33.7–40.1% vs. 0–9.7%) で区別できる。また本種は背鰭軟条がフィラメント状に伸長すること (背鰭最長軟条 26.9–35.9% SL vs. *N. thalassina* では 20.3–23.3%, オオサカハマギギでは 20.9–25.3%) や頭部背面隆起縁接合部の形状が U 字状であること (vs. V 字状) から同属他種と容易に区別ができる。ミトコンドリア DNA の COI 遺伝子領域の変異においても、本種は同属他種と明瞭に区別できる。

(高橋・木村: 〒514–8507 津市栗真町屋町 1577 三重大学大学院生物資源学研究所; 本村: 〒890–0065 鹿児島市郡元 1–21–30 鹿児島大学総合研究博物館)

## コチ科 *Leviprora* の分類学的再検討と *Leviprora semermis* (De Vis, 1883) の有効性

今村 央・Glenn I. Moore

本論文 67(2): 275–286

コチ科 *Leviprora* Whitley, 1931 の分類学的再検討を行った。本属はオーストラリア南部に分布する *Leviprora inops* (Jenyns, 1840) のみを含むと考えられてきたが、南オーストラリア州から採集された標本に基づいて記載され、本種の新参シノニムの可能性が示唆されてきた *Platycephalus semermis* De Vis, 1883 は本属の 2 番目の有効種であることが判明した。両種は胸鰭鰭条数 (*L. inops* では 18–19 本 vs. *L. semermis* では 20–21 本), 眼前棘 (ない vs. ある), 頬の皮膚性の感覚管 (ない vs. 発達する), 側線鱗の感覚管数 (1 本 vs. 2 本), および眼窩径と両眼感覚の比 (2.3–4.7 vs. 1.5–2.8) によって明瞭に識別可能である。本研究では本属の検索表と両種の詳細な再記載を与えるとともに、*L. semermis* のネオタイプを指定し、本属の新たな標徴を提示した。

(今村：〒041-8611 北海道函館市港町 3-1-1 北海道大学大学院水産科学研究院・総合博物館水産科学館；Moore：Fish Section, Department of Aquatic Zoology, Western Australian Museum, Locked Bag 49, Welshpool DC, WA 6986, Australia・School of Biological Sciences, University of Western Australia, Nedlands, Western Australia 6907, Australia)

## ニシン科サツパ属魚類 *Sardinella dayi* Regan, 1917 の有効性と *Sardinella jussieui* (Valenciennes, 1847)の再記載

畑 晴陵・本村浩之

本論文 67(2): 287–293

長らく分類学的位置づけが曖昧であったニシン科サツパ属魚類 *Sardinella dayi* Regan, 1917 をホロタイプを含む 27 個体に基づき再記載を行った。過去には *S. dayi* は本研究において再記載を行った *Sardinella jussieui* (Valenciennes, 1847) の新参異名とみなされることもあったが、前者は後者と比較して鰓耙数が多く、第 1 鰓弓上の総鰓耙数が 155–190 であること (*S. jussieui* では 137–158)、頭部、上顎、および下顎が長く、それぞれが体長の 26.3–29.6%、10.9–12.4%、11.5–13.1% であること (それぞれ 22.7–24.9%、9.6–10.7%、10.3–11.7%)、臀鰭基底が短く、体長の 13.5–16.2% であること (16.7–18.5%)、および体側鱗に多数の小孔があること (体側鱗には小孔がない) により識別される。

(畑：〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1 国立科学博物館分子生物多様性研究資料センター；本村：〒890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30 鹿児島大学総合研究博物館)

## 琉球列島から得られたイズハナダイ属 (ハタ科：ハナダイ亜科) の 1 新種 *Plectranthias ryukyuensis* チュラシマハナダイ (新称) および日本産イズハナダイ属の検索表

和田英敏・鈴木寿之・瀬能 宏・本村浩之

本論文 67(2): 294–307

ハタ科ハナダイ亜科イズハナダイ属の 1 新種 *Plectranthias ryukyuensis* (新称：チュラシマハナダイ) を沖縄諸島から得られた 4 標本 (標準体長 41.2–61.6 mm) に基づき記載した。*Plectranthias ryukyuensis* は以下の特徴によって同属他種と識別される：背鰭は 10 棘 15 または 16 軟条；胸鰭は 14 軟条ですべて不分枝；側線有孔鱗数は 29 または 30；側線上方横列鱗数は 3；頬鱗列数は 5 または 6；前鰓蓋骨下縁に 2 前向棘をもち、後縁に 20–29 の鋸歯をもつ；下鰓蓋骨と間鰓蓋骨の縁辺に複数の鋸歯をもつ (大型の個体では不明瞭)；背鰭第 1–

9 棘に小皮弁をもつ；背鰭第 4 棘が最長で，第 3 棘の 110.6–128.6%；尾鰭は浅い湾入形で，複数の軟条が伸長する；生鮮時における体の地色は桃色がかった白色で，体側上部に不規則な橙赤色斑の 2 縦列を有し（体長 50 mm 以下の個体では 2 列が互いに近接する），両列の前半部と，下方列の後半部の斑は互いに接する；側線下方に 4 本の橙赤色横帯があり，頬部に明瞭な 2 黄色斑をもつ；固定後，体は均一に黄褐色で，体側上部に不規則な暗色斑の 2 縦列をもつ（小型の個体では不明瞭）．本研究では日本産イズハナダイ属全種の検索を作成した．

（和田：〒890-0065 鹿児島市郡元 1-21-24 鹿児島大学大学院連合農学研究科；鈴木：〒546-0034 大阪府大阪市東住吉区長居公園 1-23 大阪市立自然史博物館；瀬能：〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 49 神奈川県立生命の星・地球博物館；本村：〒890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30 鹿児島大学総合研究博物館）

### インドネシアから得られたハタ科ヒメコダイ属の 1 新種 *Chelidoperca flavolineata* およびインドネシア初記録の *C. maculicauda*

松沼瑞樹・Heok Hui Tan・Teguh Peristiwady

本論文 67(2): 308–319

インドネシアのジャワ沖の水深 115–210 m から得られた 22 標本に基づきヒメコダイ属の 1 種，*Chelidoperca flavolineata* を新種として記載した．本種は文献記録によりオーストラリア北部沖での分布も確認されている．本種は同属他種のうち頭部と体が一様に紅色で体側中央に 1 本の名良な黄色縦帯をもつことでアラビア海とベンガル湾から知られる *Chelidoperca investigatoris* (Alcock, 1890) と最もよく似る．しかし，*C. flavolineata* は *C. investigatoris* と比較して側線から背鰭棘条部基部の中央までの間の鱗列数が 4 枚（3 枚の大鱗と 1 枚の小鱗からなる）であること〔後者では 3 枚（2 枚の大鱗と 1 枚の小鱗）〕，尾鰭上葉は黄色で下葉は赤色であり尾鰭基部付近の上縁に約 4 個の小さな赤色斑（固定後は暗色斑）があること（一様に黄色から赤色で斑紋はない）で容易に識別される．また，*C. investigatoris* は頭部がひじょうに大きいことで特徴づけられ，*C. flavolineata* と比較して頭長が標準体長の 45.0–46.5%（後者では 37.2–39.8%），上顎長が 20.1–20.2%（16.8–19.3%），眼後長が 26.2–27.0%（17.9–19.9%）および主鰓蓋骨棘間の距離が 5.5–5.7%（3.6–4.8% of SL）であることでも区別される．

（松沼：〒631-8505 奈良市中町 3327-204 近畿大学農学部環境管理学科；Tan: Lee Kong Chian Natural History Museum, Faculty of Science, National University of Singapore, Singapore 117377, Republic of Singapore；Peristiwady: Bitung Marine Life Conservation Center, Research

Centre for Oceanography, Indonesian Institute of Sciences, Jl. Tandurusa, Kel. Tandurusa, Kec. Aertembaga, Bitung 95527, North Sulawesi, Indonesia)

### 東オーストラリアで一般的にみられるエイ類 2 種 *Trygonorrhina fasciata* と *Dentiraja australis* の食性

Marcelo Reis · Will F. Figueira

短報 67(2): 320–329

東オーストラリアでよく混獲される *Trygonorrhina fasciata* と *Dentiraja australis* の食性について、胃内容物解析により明らかにした。両種の主要な餌は甲殻類であり、その他に魚類、頭足類も摂餌していた。両種ともに、食性に雌雄差はみられなかった。栄養段階は *T. fasciata* で 3.36, *D. australis* で 3.43 と推定された。

(Reis · Figueira : School of Life and Environmental Sciences, University of Sydney, NSW 2006, Australia)

### 極東アジアのアブラハヤ属 *Rhynchocypris* およびウグイ属 *Pseudaspius* の再記載

酒井治己 · 渡辺勝敏 · 後藤 晃

短報 67(2): 330–334

狭義の Leuciscidae の中に認められる極東アジア産のアブラハヤ類やウグイ類を含む分子系統上の単系統群 (狭義の Pseudaspininae) は, *Oreoleuciscus* 属, アブラハヤ属 *Rhynchocypris* (*Phoxinus* から分離), およびウグイ属 *Pseudaspius* (これまでの *Tribolodon* を含む) の 3 属からなる。*Oreoleuciscus* 属ならびにユーラシアに広く分布する *Leuciscus* 属および *Phoxinus* 属と比較しつつ, *Rhynchocypris* 属と *Pseudaspius* 属の再記載を行った。*Leuciscus* 属は縦列鱗数が 60 以下であること, および *Phoxinus* 属は胸鰭と鰓孔の間に楕状鱗のパッチがあることで区別される。*Pseudaspininae* では, *Oreoleuciscus* 属は咽頭歯列が 1 列であること, *Rhynchocypris* 属は臀鰭基底が背鰭基底末端下から始まること, および *Pseudaspius* 属は腹鰭基底に腋鱗があることで区別される。

(酒井 : 〒759-6595 下関市永田本町 2-7-1 水産大学校生物生産学科 ; 渡辺 : 〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科生物科学専攻動物学系 ; 後藤 : 〒040-8567 函館市八万町 北海道教育大学教育学部)